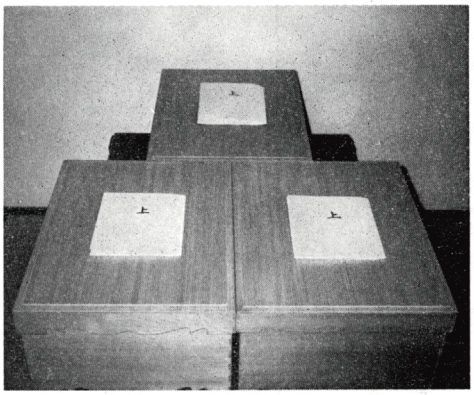
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像社
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-62-1311代
定価 一年送料共 1000円

早春の新若布御献上

═ 豪雪の中神郡漁民の真心こめて ═

天皇・皇后両陛下、皇居賢所、皇太子・同妃両殿下に毎年献上される玄界灘の早春新若布が今年も二月十九日豪雪の中無事献上された。



この献上は昭和三十八年二月に、「宗像大社海洋神事奉賛会」が結成された年より毎年行なわれている大社の重要行事で、今年で二十四回目になる。

この「宗像大社海洋神事奉賛会」は神郡宗像七浦六漁協＝大島・鐘崎・地ノ島・神湊・津屋崎・福間＝が中心となり、春の若布御献上、秋李大祭海上神幸の二大行事を柱として大社に御奉仕いただいている組織で、会長は六漁協組合長より選ばれ、現在は大島漁協組合長、遠藤案山子氏が務められている。

今年は南国九州も寒かった。正月四、五日は初雪が積り、二月に入っても小雪がちらつく日々が続いた。厳寒の中献上用若布の採取が心配されたが、二月十日頃より天候に恵まれ、十四日には各漁協より、磯の香いっぱいの最良新若布四〇キロが続々と納品された。

各漁協の丹誠こめられた板干し若布は、一枚〳〵が濃い緑に輝やき選別がむつかしい最上品ばかりである。当社では早速、担当職員、巫女の手によって厳選され、百グラム入り袋に入れさらに杉の柾板で作られた献上木箱三個に三・六キロが丁寧に納められた。

二月十八日午前八時、小雨の中本殿に於て若布献上奉告祭が斎行され、同九時職員一同に送られて当大社を出発した。

献上者は葦津宮司、随員一名、鐘崎漁協組合長・宗岡伊三氏、大島漁協参事・板矢純氏の四名である。

厳寒の中献上用若布の採取が心配されたが、二月十日頃より天候に恵まれ、十四日には各漁協より、磯の香いっぱいの最良新若布四〇キロが続々と納品された。

各漁協の丹誠こめられた板干し若布は、一枚〳〵が濃い緑に輝やき選別がむつかしい最上品ばかりである。当社では早速、担当職員、巫女の手によって厳選され、百グラム入り袋に入れさらに杉の柾板で作られた献上木箱三個に三・六キロが丁寧に納められた。

二月十八日午前八時、小雨の中本殿に於て若布献上奉告祭が斎行され、同九時職員一同に送られて当大社を出発した。

献上者は葦津宮司、随員一名、鐘崎漁協組合長・宗岡伊三氏、大島漁協参事・板矢純氏の四名である。

福岡板付空港で、当大社巫女三名から全日空スチュワーデス三名に献上若布が手渡され、十一時四十五分発全日空二五二便で捧持者一行四名とともに東京に向った。東京は小雪が舞っていた。

翌十九日、東京は深い雪である。新聞は十五年ぶりの豪雪と記している。皇居のお堀、二重橋、皇居前広場、すべてが一枚の名画である。車中で「今年の若布献上は一段と思い出深いものとなろう」と一同、窓外の景観に見入っていた。午前九時三〇分坂下門ゲートを通る。門内に入っておどろいた。宮内庁玄関まで幅五・六メートルがきれいに除雪され、各通路に数百人の奉仕団の人々が、楽しげに除雪奉仕作業をされていた。その姿におもわず頭が下る。

宮司を先頭に献上品を捧持した一行は宮内庁掌典部にお伺いし、御挨拶を申し上げ、侍従職の方を通じて、天皇・皇后両陛下に献上申し上げた。

その席上葦津宮司は「宗像の漁民が寒中の玄界灘の荒磯より採取致しました、早春の若布でございます」と、若布採取の模様を申し上げた。

引続き掌典部に於て、小井手掌典に宮司より賢所の献上若布が手渡された。本日はこの豪雪の為、賢所への参内は無理とのことである。一行は宮下掌典補の見送りを受けながら東宮へと向った。

午前十時四十五分、東宮御門に入る。こゝにも奉仕団の人々が数十名せっせと除雪奉仕にはげんでおられる。前庭のすみに大きな雪だるまが作られ、休に小石で秋田と文字が刻られている。秋田県の奉仕団の人々であろう。

東宮御所に参上し、皇太子・同妃両殿下へ侍従職を通じて献上申し上げ、午前十一時半、東宮御所を退出した。こゝに宗像七浦漁民の真心の奉仕による第二十四回若布献上の行事を終了した。今回の若布献上に際し御協賛いただいた郡内漁協関係者各位出光興産株式会社全日本空輸株式会社を始め、御関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
本社 福岡市博多区東公園二一三（〒八一二）電話福岡（〇九二）六五一—九四五六番
九州店 京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）電話京都（〇七五）三四一—三三四一代／四番
三四三—三三四一番

教育問題に想う

昭和六十年代を迎え、戦後問題の総決算を政治目標に掲げている中曽根内閣は、その一環としての教育問題について、臨時教育審議会を設け、改善に向っての努力を続けている。巷間批判の声はかまびすしいが、現状放置に一層の問題を感ずる者たちは、民間努力をも含めて、こうした努力の成果が良い結果をもたらすよう、密かに大きな期待を寄せていることも、また事実である。

我が国が経済大国としての地位を得てから、すでに年久しい。今は真の国家的独立を犠牲にして得られたこの魂なき繁栄に、自由世界からの厳しい国際的批判が集中しているのである。次世代に対する教育責任の中心は、恐らく、厳しい環境条件に耐え抜ける人材の育成、という方向にこそ求められよう。そのためには、何よりも文化的価値伝統に対する国民的自覚、高度な国際的視野、そして同時に、技術能力の向上が志向されなければならない。高等教育機関に課せられた責任は、極めて大きいのである。

○

しかし、高等学校、大学の教育現状は、果してその責任を果し得ているであろうか。この設問に、積極的な肯定の回答を出しうる者は、恐らくほとんどいないに相違ない。確かに普通教育における学力の国際比較では、我が国が世界でも最上位層にあることは、よく知られている。しかし、だからと云って、その学力が、直ちに産業、政治、文化の活力たりうるかどうかは、きわめて信頼性に乏しい。

高等学校教育は普通課に集中し、その内容は大学受験のための技術に毒されて、文化的能力としての性格をいちじるしく損なわれたものに堕している。

この傾向は、その反面にいわゆる落ちこぼれの生徒を生み出し、大学入学を到達目標にして、入学後の本来的な目的である自由で、専門的な学業への取組姿勢をさえ、歪める役割りをも果しているのである。

高等学校のランクづけは固定化し、学校内の雰囲気はそれに従って決定されている。学力の分布が正常配分曲線を示してこそ、学園は一般社会と同様な教育の場としての活力を保持しうる。それが学校そのもののランクづけによって著しく阻害され、特定大学への入試合格技術を教える予備校と変らぬ状態を造り上げているのである。大学への志望は、この情況と並行して、学校そのものの社会的評価、それも特定大学への入学率によってランクづけられるという歪んだ形での評価のために、高校教師が強力な指導権を持って決定することが行われている。学校が生徒にとって、喜怒哀楽や青春の夢を共にする友義の場としては、成立し難くさえなっているのである。

だからこそ大学に入り得た彼らは、学業からの解放を求め、それが目的だと思い込まされて来た就職までの猶予期間を、出来るだけ永いものとし、今まで心理的に禁じられていた同年代との非生産的なエネルギーの消費に、最大の関心を示すようになってしまう。学業は高校時代までに習い性となった既成知識の単純記憶の手法から一歩も出ることが出来ず、大学が真の自己を発見する場としての意味を失ってしまうのだと言わざるを得ないだろう。

○

もちろん、何事によらず否定的な面だけを強調するのは間違っている。事実我が国は、世界でも最も高い高等教育就学率を示し、その力がGNPの増大に与かって力あることも疑えないからである。戦後、大学の数は急増し、今なおその傾向が続いているが、大学の質、学生の平均的な学力が低落傾向を示しているとはいうものの、上位クラスの実力が決定的に低下したというわけでは、決してない。

昭和六十七年をピークに、出産動態の影響を受けて、私立高等学校の相当数、そして当然大学もまた、経営上の危機に逢着することは必至だと云われる。国際情勢と併せ考えると、好むと好まざるとに拘わらず、学校・教育の改善は、焦眉の急なのである。理念の確立こそが第一義であると云って間違いはないだろう。

底冷えのする季節、私立学校の入試がほぼ終り、国公立大学の第二次が始まろうとする今、教育問題を共に考えてみる意義は、十分あるに違いない。

（神社新報より）

余滴

卒業式シーズンになると決って、日の丸、君が代論争が起る。今年も一部の学校で、国旗の盗難や、国歌斉唱に反対して先生の欠席や、生徒の不起立などがあったようだが、大勢は次第に正常化しつつあるようである。

しかし、それに魂が入っているか否かになると少々疑わしい。数年前、或る小学校の卒業式に来賓として参列したことがあったが、君が代斉唱の時になって、来賓席からの歌声があまりにも小さいのと、中には歌詞を間違える人もいたのには驚いた。昔は、君が代の歌い方について、息のつぎ方まで厳しく教えられ、歌の意味を充分わきまえた上で歌っていたものである。

戦後四十年、国旗、国歌はあまりにも放置され過ぎた。昨今のカラオケブームで、歌うことには慣れている大人達でさえも、君が代を歌うときには、いささかの戸惑いを感じるようである。

ニューヨークのホテルに泊った時のこと。朝八時頃、ロビーの座席に坐っていると、急に周りの人々が起立したので、何事が起きたのかと眺めていると、ホテルの従業員三人が国旗を捧持して通り、玉関横の戸外のポールに、この星条旗を高々と掲揚した。その間、宿泊客は終始無言のまゝ起立。

日本では、とうの昔に忘れ去られてしまった光景がアメリカでは、ごく普通のこととして定着している。

自由な海外旅行の保障や、円高の思典も、日本国籍があればこそ。オリンピック の興奮も、メインポール上る日の丸に感激は倍加される。真の国際人は真の日本人といわれる。日の丸、君が代論争も真の日本人としての自覚をとり戻すための陣痛かもしれない。

第二九六回 宗像大社歌会詠草

中村吾郎選　毎月末日〆切

東郷　藤崎　辰子
白き胡麻を一升瓶に貰い来ぬ古里にまだ母在るごとく
（評）一升瓶の白い胡麻が印象深い。結句の「母在るごとく」が適格で一首をよくささえている。

深田　中野　節子
幾重（かさ）ね下げたる絵馬の寒風にふれ合ひて鳴る音のしたしも
（評）絵馬には人々の願いが籠っており、響きはあるのだが結句はとれでよいかどうか。一考ありたし。

吉留　白木うめ
急坂を這ひ登り来て振り返る視野に疎遠の古里も見ゆ
（評）疎遠となった古里という処に思いがある。只、二句の「這ひ」が情感を阻害しているのではないか。

大島　板矢あきえ
風花の舞ふ日わが店に来る人一様に背を丸めをり

池田　小田　イセ
宵はやく赤提灯に火の入りて今日の一日の暮れむとすなり

八幡西　山田　耕夕
合格の祈願の絵馬の並ぶなかに病みの癒ゆるを書きて吊せり

原町　中村　幸
御手洗に沈みゐし清き一枚の枯葉が迫る夜寝ねてより

原町　塩川ハルコ
寒風にいたぶられつつもしだれ梅紅き蕾をしかと抱きおり

香椎　桜井　ツ子
暮れ方の躑躅の下を移りゐて寂しきみそさざい高くは飛ばず

原町　白石ケ丘　後藤君代
剪定の枝を挿したる沈丁花冬枯るる庭にみな蕾もつ

自由ケ丘　後藤君代
剪定の枝を挿したる沈丁花冬枯るる庭にみな蕾もつ

武丸　立石ろせ乃
屋根と屋根の間を通る夜明けの月われを照らして時の間に過ぎぬ

池田　永富　臻
復員の年に植ゑたる裏畑の梅の一樹に実のあまたつく

福間　広渡一寿軒
杖で描く地図にて示す曲り角媚が教ゆ山寺への道

大島　目原　節子
初に見る降雪尺余の峠越えまぶしき白の杉生にそひゆく

大島　屋形とみえ
息も孫も帰らぬ夕餉ただ一人聞くは激しく湯のたぎる音

大島　大島　勝代
除夜の鐘鳴り納まりて港よりおごそかに聞く年寿（としほ）ぎの汽笛（ふえ）

池田　池口　力夫
楼めぐり経を唱えて鐘を撞く僧侶の見ゆる寒き夕暮

通り堂　木梨よしの
師走よりダンプカー数多喰りゐて造成用地の山一つ消ゆ

鐘崎　安永　久子
保母なりし嫁の酒ふ幼等に語りかけゐる言葉はやさし

曲　天野トモエ
友の死に友の病に悲しみてふと思いつき山に苔採る

原町　八波　五月
腰病みて逢ふ手立てなき友と我も逢ひ度しと書く互（かた）みの賀状

田久　立花　勇雄
朝戸繰るその一瞬を山茶花の茂みゆ鵯は目每飛びたつ

日の里　清原　絹代
五十年を経て逢い得たる友の面見入りつつ名をくりかえし問ふ

徳重　石松や寿子
粉雪まう風にさゆゐる南天のかたえに白玉椿凛として咲く

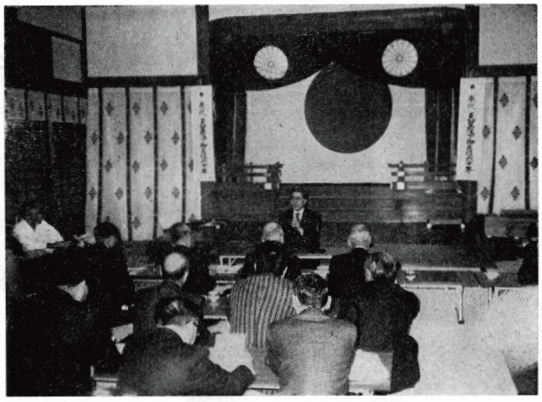
戸畑　田中ハツセ
勇しく第九を歌ふ合唱の指揮者自ら口あけて歌ふ

武丸　立石ろせ乃
屋根と屋根の間を通る夜明けの月われを照らして時の間に過ぎぬ

池田　永富　臻
復員の年に植ゑたる裏畑の梅の一樹に実のあまたつく

福間　広渡一寿軒
杖で描く地図にて示す曲り角媚が教ゆ山寺への道

宗像大社菊花会
発足十五周年特別講演会
並びに総会開催



宗像の秋を彩る西日本菊花大会は、名実ともに西日本地区最大の菊花展との地位を確立して久しいが、昨年度第十五回の大会も無事盛会裡に終了した。この大会を主催する宗像大社菊花会も発足十五年という大きな節目に当り、これを記念して去る一月二十六日当大社清明殿において特別講演会ならびに総会が開催された。

当日は寒風の中、九州各地の菊友会の代表である当会所属二十四団体より選出された八十四名の役員が参集し菊花会・菊花展の運営につき協・審議がなされた。

総会は拝殿に於ける正式参拝の儀を了えて後、定刻午前十時清明殿にて開会された。会長の式辞、来賓である当社葦津宮司・神社本庁末安大孝部長の祝辞と続き、当菊花会発足当時より十五年間に亘って運営支援をいただいた樋口芳郎顧問（玄海町池田）、高原鹿吉会長を始め二十余名の功労者の方々へ葦津宮司より感謝状と記念品が贈呈された。

次に議事に入り高島理事長を議長に選出し本年度の方針案・役員改選案等の議案が上程された。会期日程については後述の通り決定した。役員改選は、会則第七条により二年の任期を終了した正副会長・理事長の辞表が出されたもので、さっそく各地各会代表一名をもって代表者会議を別室にて開き、万場一致で高原会長・高島理事長の現執行部が七期連続再選された。尚副会長は北九州地区三名、筑豊遠賀直方地区一名、宗像粕屋地区一名、福岡春日筑紫筑後地区一名、長崎・佐賀・熊本・大分・山口各県各一名の十三名が新たに選任された。

総会に引続き会発足十五周年記念講演会に入り、特別に東京より招聘した元宗像大社権祢宜で当菊花会初代事務局長でもあった神社本庁組織渉外部長末安大孝講師が高島理事長により紹介された。末安講師は「神賑行事としての西日本菊花大会について」との演題により「昭和四十五年宗像大社昭和の大御造営本殿遷宮奉祝神賑行事として九州地区最大の菊花展開催が計画立案され、その担当者に任命されて以来全く菊には素人であったが、現在の高原会長を始め多くの菊花作者の方々の支援協力を得て、昭和四十六年宗像大社菊花会が発足、同年十一月一日第一回大会を開催出来たことなど会発足当時の苦労話を披露された。又菊担当者の使命感、そして菊花製作者の花に対する愛情の大切さとを述べられたあと、この趣味の菊作り製作者が、社会の人々の花を愛するゆとりある心を育成し、豊かな家庭、和みある地域社会づくり、さらには平和な国家建設への大きな目標に向って今後更に精進されるよう望む」と時にはユーモアを交えながら熱っぽく会員に語りかけられ、一時間余に亘る講演を終了された。

その後末安講師を囲んでの祝賀懇親会が開かれ、発足当時の各会指導者と旧交をあたため又十五周年を迎えた菊花会の更なる発展の意気に燃える会員の方々が和気あいあいの内に玄界灘の魚料理に舌づつみを打ちながら穏やかな歓談が続き午後五時すぎ当日の全ての行事が終了し散会した。

〈菊花展日程〉

搬入	十月二十八日
審査	十月三十一日
開会式	〃
表彰	十一月十六日
会期	十月三十一日～十一月二十三日
搬出	十一月二十四日

〈功労者表彰名簿〉

顧問	樋口芳郎	宗像
会長	高原鹿吉	粕屋
〃	伊藤富夫	飯塚
副会長	駒山直次	門司
〃	高田太助	八幡西
〃	竹内豊	小倉南
〃	小沢新助	宗像
〃	伊達学	若松
理事長	高島茂人	遠賀
〃	古波蔵正忠	八幡西
〃	森田長命	直方
〃	吉崎三吉	宗像
〃	楠理	〃
〃	佐野功	門司
〃	柏木幹次郎	八幡西
〃	川崎正木	筑豊
〃	青谷貞五郎	粕屋
〃	池上福元	門司
〃	田代定	飯塚
〃	野定	粕屋
〃	西河貞男	直方
〃	西宏	八幡西
〃	篠原久雄	宗像
連続出品波多野松男		八幡西
〃	前野ますえ	〃東
〃	加藤忠雄	八幡西

以上二十六名

〈新三役名簿〉

会長	高原鹿吉	粕屋
副会長	宇部宮弾	大社
〃	駒山直次	門司
〃	高田太助	八幡西
〃	竹内豊	小倉南
〃	伊藤富夫	飯塚
〃	小沢新助	宗像
〃	高山勉	筑後
〃	橋口武夫	佐賀
〃	坂本藤夫	長崎
〃	松浦雄次郎	熊本
〃	堀尾米吉	〃
〃	古谷静次	山口
〃	久田益三	大分
〃	高島茂人	遠賀
理事長	堤宏	大社
事務局		
〃	門司成人	〃
〃	樋口寿美江	〃
〃	春田千鶴子	〃

以上

昭和六十一年
建国祭（旧紀元節）
盛大に斎行

日本国家建国の慶日にあたる、去る二月十一日午前十一時、当大社本殿に於て葦津宮司以下全神職奉仕のもと、氏子・崇敬者多数参列の中、建国祭が盛大厳粛裡に斎行された。

日本書紀によれば、「神日本磐余彦尊（カムヤマトイワレヒコノミコト＝神武天皇）、日向より御東征の途につかれ、やがて大和に進軍して平定の大業成り、辛酉年春正月元旦に橿原ノ宮に於て即位の式を挙げられた」との旨が記載されており、初代天皇である神武天皇の即位時を「日本国家建国の日」としているわけである。

戦前までは、「紀元節」として広く親しまれていたこの日は、終戦後の占領政策による民主々義政治の指針の一つとして、昭和二十二年には廃止という憂目にあった。

しかしながら、国民の世論は紀元節復活に傾き、昭和四十一年十二月九日には、政令により「建国をしのび国を愛する心を養う日」として「建国記念の日」と名称を改め、再び国家の祝祭日と定められたわけである。

以来、年を重ねるごとにこの日は、政令により「建国をしのび国を愛する心を養う日」として「建国記念の日」と名称を改め、再び国家の祝祭日と定められたわけである。

以来、年を重ねるごとに奉祝行事も盛大に催されるようになり、誠に喜ばしいかぎりである。

本年も全国各地で大小様々な式典が執り行われたわけであるが、福岡市では県神社庁会館に於て「奉祝県民大会」が、七百余名参加のもと盛大に催された。

昭和六十一年は、西歴では一九八六年、日本書紀に記された皇紀で数えると二六四六年ということになる。

この様に私達の住む日本は、世界でも有数の建国の歴史の長さを誇れる国である。私達はこのすばらしい歴史と伝統をもつ日本の国柄を認識するとともに、末永く守っていかねばならない。

孔大寺神社春祭り

去る三月二日、孔大寺神社（玄海町池田鎮座）の春の大祭が斎行された。

孔大寺神社は、当大社の旧境外摂社で、宗像郡の東北、遠賀郡との境にそびえ立つ四ツ塚山連山（城山＝じょうやま、金山、孔大寺山、湯川山）の最高峰孔大寺山（標高四四九九米）の山腹に鎮座する。

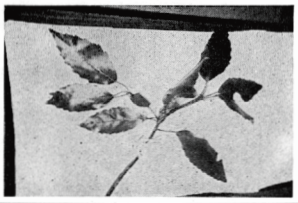
御祭神は、大己貴命、少彦名命をお祀りし、中世には吉野蔵王権現と習合していた。例祭日の二日には、毎年当大社より献幣使が出向、幣帛を供進する。

当日は、近年になく好天気に恵まれ、早春の陽光を浴びながら、草で覆われた長い石段を登ると玄界灘が一望にひらけてきた。

参道の途中には、わづかながらまだ雪が残っている所もあった。

祭典は午前十一時より地元池田区の氏子等十数人が参列のもと厳粛裡に斎行された。

特別授与品として赤い実のついたアオキの小枝に小さな草履（地元の婦人会が作ったもの）をつけた魔除け守りが参拝者に授与された。



また、疫病退けに御利益があると伝えられており、当日のために用意された約一五〇体全部が、みるみるうちになくなった。参拝者は、老若男女を問わず日曜日と好天に恵まれたとも加わって、山の中腹に鎮座する〝おやしろ〟にもかかわらず四時すぎまでつづいた。参拝者もまばらになった四時すぎ一年に一度のまつりを終え、神職、氏子とともに社殿をあとにした。

宗像大社
春まつり（保存会）御案内

春の大祭を左記行事日程で斎行致しますので、皆様方お誘い合せの上、御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

昭和六十一年三月吉日

宗像大社々務所

記

三月三十一日	午後五時	総社地主祭
同	午後六時	宵宮祭
四月一日	午前十一時	大祭（氏子奉幣、風俗舞、浦安舞）並に交通安全講社祭
二日	午前十一時	総社祭（献上若布採取者表彰） 高宮祭並に高宮地主祭 第二・第三宮祭 宗像護国神社祭 献茶祭（南坊流小方社中）
同	午後二時	

主な行事

四月一日	午前九時	奉納剣道大会（於境内—本殿脇）
四月三日	午前十時三十分	奉納吟詠大会（於清明殿）
四月二十二日	午後五時	沖・中両宮宵宮祭
二十三日	午前九時	沖津宮大祭（沖津宮遥拝所）
同	午前九時三十分	御嶽神社祭
同	午前十一時	中津宮大祭

神郡社寺めぐり (12)
和歌神社
宗像市大字大井字ワカ

当大社前を通っている県道六九号線を宗像市東郷東口に向って走ると小さな昇り坂に至る。これが大井坂である。冬期の積雪など、この坂を境に宗像市と玄海町とではずいぶん積量に差がある。海流による暖風もこの峠でさまたげられるのであろうか。

この峠の下より右折し約五百メートル用山ダムに向って走ると左側に石鳥居があり扁額に「和歌神社」と記されている。

二基の鳥居をくぐり拝殿に至る。正面に立派な神額があり、「和歌宮」＝官幣大社宗像神社宮司従六位幡井字ワカ鎮座、和歌神社とする。現今、例祭は十月十五日。社殿は本殿流造・拝殿。境内六四一坪余。氏子六十戸である（新明細帳）。と記されている。

境内はしずかで、左に須賀神社、国玉神社の二末社があり、参道右手に銀杏の大樹がある。

年ごとに人口増加を見ている宗像市であるが、この大井地区はまだ開発の手が加えられず、自然の山河がのこっている。しかしこの地に人工的造成がなされるのも時間の問題であろう。この美しい自然もブルトーザーの鉄爪でくずされるのかと思うと、人の世の流れとは云え、無情の感深きものを感じるのである。

奉納がなされても不思議はない。

神社史を見ると、続風土記附録宗像郡上大井村の条には、「和歌大明神社フヂガタニ＝神殿方二間、拝殿二間・三間、石鳥居一基、祭礼九月廿五日、奉祀田嶋村命婦＝産神也。人麿明神を祭る。永正二年（一五〇五）大宮司氏続勧請せりといふ。」といひ、同拾遺十八同村の条に、「和歌大明神社、若か谷と云所に在。既に宗像七十五社の内に入たれは」云々とある。明細帳によれば、東郷村大字大井字ワカ鎮座、和歌神社とする。現今、例祭は十月十五日。社殿は本殿流造・拝殿。境内六四一坪余。氏子六十戸である（新明細帳）。と記されている。

境内はしずかで、左に須賀神社、国玉神社の二末社があり、参道右手に銀杏の大樹がある。

年ごとに人口増加を見ている宗像市であるが、この大井地区はまだ開発の手が加えられず、自然の山河がのこっている。しかしこの地に人工的造成がなされるのも時間の問題であろう。この美しい自然もブルトーザーの鉄爪でくずされるのかと思うと、人の世の流れとは云え、無情の感深きものを感じるのである。

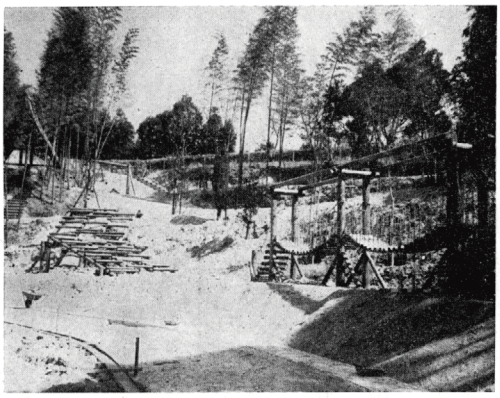
和歌神社の祭神は柿本人麿である。三十六歌仙の額

自然と親しみのびのびと

═ 待たれる福間町野外施設のオープン ═

都会では自然と親しみ、青空の下でのびのびと遊び、健康的な汗をかく場所がめっきり少なくなっている今日、宗像郡福間町手光に、福間町教育委員会により、子供達のための野外施設の整備が着々と進められており、三月末には一応完成する予定である。

この施設は、同町の新しい中央公民館や、町民ホールの建設予定地の一角にあり、工事費約一億二千万円をかけ、一万四千平方メートルを造成、建設中で、アスレチックフィールド、キャンプ場、ローラースケート場、ジョギングコース、芝生広場などが整備され、施設が完成し、芝生が完全に根付いた時点で、一般に開放される。



建設場所は、宮地嶽神社の近くで、日当りもよく、丘陵の一部を造成し、丘陵の起伏を利用して、自然と親しみながら遊べるようになっている。

アスレチックフィールドには、ロープ登り、タイヤ渡り、展望台などを始め、八ポイントが設けられ、キャンプ場は百五十人が収容できる。ローラースケート場は二百五十平方メートルの長円形を舗装し、ジョギングコースは一周二百メートルとコンパクトにまとめられている。

アスレチックフィールドの遊具は、すでに据え付も完了し、遊歩道やその他の施設の建設が現在着々と進行中で、地元の子供達は、一日も早い開放を待ち望んでいる。

宗像地区は福岡、北九州両百万都市の中間に位置することから、近年、住宅地の造成、開発が急ピッチで進んでおり、緑豊かな自然が次々と破壊されている。昔は自然が子供達の遊びの対象であったものが、その自然も以前に比較すれば、随分と少なくなり、子供達の遊びの形態も様変りしている今日、福間町の野外施設は社会教育の面で大いに注目されるところである。

宗像市の総合公園計画、玄海町の運動場広場など、地方自治体による、地域住民の健康管理、ライフスタイルにあわせた施設の整備、拡充が行われているのも時代の流れを感じさせる。

釣川を描き続けて

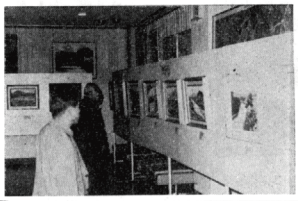
═ 桑野　恵氏「釣川百景展」 ═

宗像の歴史をその川面に写して来た釣川を、長年に亘り描き続けて来た、宗像市美術協会々長桑野恵氏の個展「釣川百景展」が、宗像市中央公民館ロビーに於て、一月末より始まっている。すでに一・二回目の展示は終了したが、第三回目は四月の中旬過ぎより河東橋より大井間を、第五回目は大井より上多礼橋間、第六回目は上多礼橋より河口迄の釣川本流の風景画を展示、その後支流の風景画を四、五回に別けて、計百四十点余りの作品を約半年間に亘り展示する。

桑野氏が描いた釣川の絵画で最も古いものは、昭和二十三年の作品で、その後機会があるごとに、釣川本・支流の風景画を描き続けてこられた。作品の中には五十号の大作や、日本画、水墨画風の試作品などもある。

桑野氏は釣川を描き続けてこられたことについて、「小さい時には釣川でよく遊んだものです。その後宗像を一時離れましたが、昭和十一年宗像にもどってまいりました。それ以来教師としてこの地に住んで来たのですが、子供の頃よく遊んだ釣川への想いと、水の風景が好きなものですから」と語られ、「これからもずっと描き続けます」と、なお意欲的であった。

桑野氏の釣川の絵には、宗像の変遷が写し出され、郷土への想いが込められていると共に、宗像に住む人々が、今一度自分達の住む街を見つめ直していただければという願いが込められているようである。



漂う新酒の香り

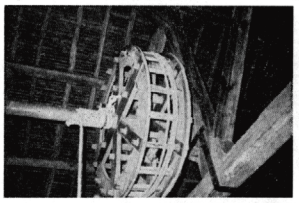
═ 勝屋酒造が酒蔵を開放 ═

当大社の神木「楢」をシンボルにして、銘柄「楢の露」を醸造している、宗像市赤間の勝屋酒造（代表山木博次）が、去る二月九日一般の人々に酒蔵を開放、終日多数の見学者で賑わった。

勝屋酒造は創業以来約二百年、建物の造りも昔のままで、天井には太い梁が通っていたり、昔酒造りに使われた、直径約一メートルの木製滑車が残っているなど、酒造りの長年の歴史を物語っている。

当日は、同酒造の奥に広がる清酒の製造場で、精米、洗米、米を蒸すなどの醸造過程の説明や、蒸した米でこうじを作るこうじ室、大きな仕込タンクを公開したりと、日頃店頭でしか目にすることのない清酒の、出来上がる過程が紹介された。

また、原酒や一級酒・二級酒などを味わい分ける、利き酒コーナーが設けられた。同酒造の吟醸「楢の露」は、当大社の神酒でもあり、昨年は銘酒に与えられるリボン大賞を二度も受賞するなど、愛飲家にとっては、蔵出しの新酒を賞味出来るまたとないチャンスだけに、左党の見学者が次々と挑戦していた。



冷に、熱燗にと、日本人の生活と共に歩んで来た清酒も、昨今は焼酎やウイスキーなどに少々おされぎみなだけに、今回の催しを機に日本酒の美味しさを再認識していただければ、また清酒は生きたものであり、その醸造過程を、酒造りの苦労などを、皆様方に少しでも知っていただければと醸造元では願っていた。

お知らせ

「故郷の神宝」西日本新聞に連載

当大社松本肇学芸員の執筆により、沖津宮の鎮座する神島、沖ノ島祭祀遺跡より発掘された、神宝類を紹介しながら、当時の祭祀形態と、宗像の歴史を考察する、「故郷の神宝」と題した郷土史を、二月一日より西日本新聞に連載している。

これは宗像地区の歴史と変遷を、シリーズものとして掲載してきた同紙が、大十回シリーズとして、月曜日並びに祝祭日の翌日陸との要所で、古代から中を除いて毎日連載される。

この連載により読者の皆様が、千数百年を者にわかりやすく解説しようとするもので、百五

世にかけて、大和朝廷の重要な拠点であった、この地方の歴史的意義を、「海正倉院」と称される、沖ノ拝館され、一千年昔の古代に夢をはせて下さい。

逆上って古代のロマンにひたっていただき、また当大社神宝館の祭祀品を

地ノ島の春　島からの花便り

沈鐘伝説で有名な鐘崎、この鐘崎港に立つと、手のとどく感じで「地ノ島」が目前にある。

宗像郡玄海町地ノ島、人口約四百の漁業中心の島である。

この地ノ島は＝椿の島＝としても知られている。この地で生産される椿油は、現在でも髪油として根強い人気を持っている。

地ノ島には約三千本の椿が自生している、今年の冬は、南国九州も寒さが厳しかった。三月初旬にも積雪を見た九州、こうした寒風の為か今年の椿の開花は例年よりおくれている、と地元の人は云う。

地ノ島へは、鐘崎港より町営渡船「第二玄海丸」が運航している。約三十分で白浜港に着く、島の中央の小高い山中に小学校がある。全校生徒十四名、まさに南国の「二十八の瞳」である。この島には、交通地獄もない。まってこの小さな学園には「非行もない、いじめもない、こんな言葉に縁はない」といえる。楽しく先生と生徒がボールを追い、小鳥を相手に椿の自然林で「春よ来い／早く来い／」と走りまわっている。

この小学校の前にも椿がある。紅い花を二、三輪早春の風にゆらせている。満開の三月中旬ともなれば、島全体が真赤になると、この地の老漁師は云う。

地ノ島では椿を「カタシ」と呼び、この実を大切にして来た。この実から取った油は、薬になり食糧になり、しぼりカスは肥料になる。「花よし、実よし、カスもよし」古くより人間に大切にされた椿には、それだけの意味があったのである。この「椿の島」地ノ島で、春うららかな一日を過すのも楽しいものだ、山頂よりの玄界灘のながめは天下一品である。

宮中歌会始の儀　二度の入選を祝う

養父峯子さん祝賀会

═ 町内有志一同が祝う ═

新年号でも報じた当大社養父祢宜夫人、峯子さんの宮中歌会二度の入選を祝う祝賀会が、二月二十七日午後五時、当大社清明殿に於て開催された。

小雪の舞う天候であったが玄海町内有志百余名が集い、養父さんを祝福した。玄海町文化協会長辻野平（ひとし）氏を中心に実行委員会が結成され、この呼びかけに、玄海町長を始め各種団体代表者が参集した。

席上和田町長が「町民の栄誉」ですと祝い、「ぜひ三度目の挑戦を」と祝辞を贈り、養父さん所属のコーラス仲間より花束が贈られ記念品が贈呈された。

和服の正装姿で胸に赤いリボンをつけた養父さんより、「自然と人情があふれるこの町に住んだことが、二度の受賞につながったのではないかと思います。

これまで歌は一人で楽しんでまいりましたが、心温まる今日の祝福を生涯忘れないでしょう」と静かな口調の中にも歌人らしい心に響く謝辞を述べられた。

養父峯子さんの二度の入選は、玄海町の誇りでもある。今後益々御活躍されんことをお祈り致します。

社務日誌抄

二月一日　月次祭
二月三日　節分祭
二月四月　出光石油化学千葉工場副工場長下里正人氏参拝
出光興産㈱店主室長代理澤田茂氏・福岡支店副支店長上月永文氏・同総務課長奈良晄氏・福岡教育大学安永学長・同事務局長・伊豆善也県議会議員来社
二月七日　神湊津加計志神社初午祭
出光興産㈱神戸支店販売店会十四名参拝
二月九日　出光興産㈱松本支店長篠田司郎氏外光運会関係者四名参拝
出光興産㈱福岡支店販売二課長東口勝之氏外一名参拝
㈱増田徳兵衛商店社長増田徳兵衛氏夫妻参拝
新潟県・川崎商会店主川崎俊永氏参拝
筑穂町・大分八幡宮敬神婦人会四五名参拝
宗像郡遺族会青壮年部会議
熊本鉄道管理局総務部参拝団四五〇名
宇土駅営業サービス管理センター参拝団五〇〇名
人吉駅旅行センター参拝団三〇〇名
沖津宮太鼓奉納式
二月十一日　建国祭
東京出光会十七名参拝
八代駅旅行センター参拝団一〇〇〇名
熊本駅旅行センター参拝団四〇〇名
二月十三日　アポロサービス㈱営業三課長矢野健氏外三名参拝
出光興産㈱大宮支店十二名参拝
二月十四日　千葉旭興産㈱四名参拝
龍泉総主高安六郎氏外三名参拝
九州公安調査局長井元弘平氏外五名来社
東京学芸大学々長関四郎氏・福岡教育大学々長外二名来社
二月十五日　月次祭
定例職員会議
宗像郡遺族会役員会
二月十六日　太宰府天満宮講社川崎支部大津氏外五四名参拝
二月十八日　若布献上奉告祭
玄海町消防団第一分団歴代分団長会
二月十九日　若布献上
二月二十二日　出光美術館々長代理末松良介氏・東京都・小川貞夫氏・水嶋龍一郎氏外二名参拝
三菱電機㈱電子システム事業本部顧問川口豊氏来社
二月二十五日　宗像市役所農地整備課四〇名来社
二月二十七日　猿賀神社宮司山谷敬氏外二名参拝
出光興産㈱仙台支店・協力会関係者参拝
養父峯子さん宮中歌会始入選祝賀会

宗像大社歌会 俳句作品集（二七）

福　間　広渡一寿軒
天恵の陰に萌へ出づ籾一粒

田　熊　力丸　一郎
極楽の夢心地なる日向ぼこ

鐘　崎　岩瀬　辰夫
曽孫を抱く喜びや雛祭

大　井　吉田　杏子
春近し浮く雲の色風の音

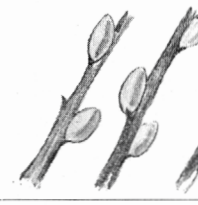
香　椎　板矢クニコ
長廊下ナースの服の夏めけり

田　熊　安部　ゆき
老幹のいのちを秘めて芽吹きおり

津屋崎　西住喜三郎
かたき芽の日々に艶まし春近し

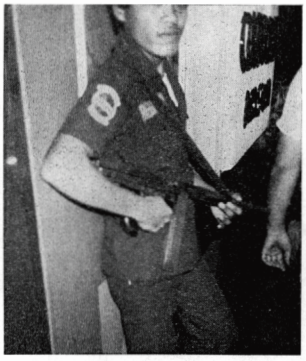
福岡中央　力丸玄風
佇つ庭に日々を自適の下萌ゆる

藤　沢　井上　玄洋
早春の日射し巻きまき波挑む



海の寄物（続）6

いしいただし


サンポアンガのレストラン入口にて

寄物から少し話がそれるが、ダバオで忘れられないことがあった。

ダバオはフィリピンでも日本人が最初に入ったところであることは、5で述べた。

私達がダバオのホテルに宿泊している時、この地に在住されている久保田健氏から電話がかかってきた。

「自分は材木関係の仕事に従事しているかたわら、夜はダバオの学生に日本語を教えている。よかったら学校にきていただいて、生徒達と交歓会をしていただけないだろうか」という内容のものであった。私達四人はその申し込みを承諾した。夕方にはホテルへ、久保田氏が車で迎えに来られ、私達はそれに乗って学校へ向った。

学校（専門学校）は、電圧が低いのか、薄暗く、沈んだような校舎で、生徒達が、あちこちに車座になってたむろしている。

案内されて教室に入ると、前もって予告されていたのか、生徒達が笑顔で待ってくれていた。みんな向学心に燃えているかのように、フィリピンで見るどの顔よりも、生き生きとしているように見えた。

まず最初に久保田氏から一人一人紹介があり、次に私達は日本語や英語で、自己紹介をした。それから生徒達は、習い覚えた日本語で私達に質問をする。その生徒の質問の日本語を、久保田先生は、正しく発音をし説明をされ、英語をまじえて、ひとつひとつを実に丁寧になおされていた。時には ユーモアをまじえ、生徒達は爆笑したりして、進められた。言葉を教える事は大変なことであるが、生徒の使う日本語は、そのような効果のあらわれであろうか、正しくきちんとしたものであった。久保田先生には頭が下がる。

彼等は本当に一生懸命であった。彼等の希望を聞いた時、日本へ行ってコンピューターやそれぞれの専門学校で学びたいと目を輝かしていた。

久保田先生が何故に、このような事をされるのか、後日、先生からいただいた手紙がそれを語ってくれる。

「一九七二年に単身でフィリピンに参り、一九七七年家族を呼び寄せ、ダバオに根を張って以来、もう十二年、その間、色々なタイプの色々な日本人がダバオにやって来ましたが、生活の本拠をダバオに持つ日本人として、少しでも地域社会に役に立てたらと、小さな努力を続けさせて頂いて居ります。

特に最近、政経共に不安定な中にあって、小さな世界に閉じこもりがちなフィリピンの若い人を見て居ると、日本の若い人達がどんなに恵まれて居るか、声を大にして、そうした日本の若い人達に教えてあげたくなります。

日本で今問題と成っている「落ちこぼれ」諸君にしても、小生から見ると単なる甘えでしかありません。「落ちこぼれ」「反抗」する事で最低限の自己主張が出来るのですから。

フィリピンには「落ちこぼれる」余裕すらない人達が多いのです。学校へ行って勉強出来ると言う丈で幸せなのです。

中学校の段階から夜間授業は当り前、多くの学校が昼夜の二部制です。それも夜の学校は授業料が安いから…とか言うのではなく、国が貧しく校舎が足りないからなのです。お金のない人の為には、日曜日に集中して勉強出来る日曜中学、日曜高校があります。日曜一日、朝七時から夜七時迄に必須の課目を教わるのです。こうした事に日本の子供達は耐えられるでしょうか、そう言う環境に置かれた丈で、勝手に「落ちこぼれ」て行ってしまうのではないでしょうか。

そうした変則的な授業を受けながらでも、フィリピンの子供達は明るいのです。底抜けに明るいのです。

小生は日本のそうした心の弱い「落ちこぼれ」諸君や今の状態が極く当り前だと思って居る「甘ちゃん」達に、こうしたフィリピンの実情をじっくり見せて上げ、自分達の国、日本が如何に恵まれた素晴しい国であるか、フィリピンを反面教師として学んでもらいたいのです後略』。

日本は「落ちこぼれ」がなんと、年間十万の高校生が中退していくのである。そして今問題となっている中学生の暴力、いじめ等が起っている。一方この稿を書き終えた時フィリピンでは二十年のマルコス独裁政権が崩壊した。

古代史探訪 (15)

宗像族の墓域を追う (六)

宮地嶽古墳　津屋崎町字宮司

玄海町神湊から海岸沿いに、八キロにわたってつながる丘陵の麓の台地を、散策しつつ行くと、宮地嶽神社に着く。この間には前方後円墳を含めて、二三〇基程の古墳が集合し、北から南へと一大古墳群を形成している。ここは、玄界灘を見晴しした展望がきく、立地条件が良い高所である。

宮地嶽神社本殿裏手の奥ノ院には、巨大古墳の「宮地嶽古墳」がある。この古墳は標高六十メートルの高台にあり、一大古墳群を飾る終点であるとともに、古墳時代の終焉にもあたる。

現在径三十四メートルをはかる円墳であるが、内部は長さ二十二メートルもあり、奈良県石舞台古墳と同等の巨大石塊を使った、巨大な横穴式石室が構築されている。石室の最大幅二、六メートルであるが、一石あたり幅四メートル、高さ二メートルの巨石で石室を造っている。天井石は長さ五メートルを計るのもある。石室内の床面にも巨石が敷き込まれている。

羨道部と玄室部との区別が明瞭ではないが、石室の一部の左右側壁に、龕（がん）状にくぼみを掘り込んでいる所がある。これが羨道と玄室との境と思われる。奥壁にも同様な技法で小室を構成させている。

標高六十メートルもある高台につくられた、古墳の石室の石材は、四キロ離れた恋の浦海岸の重箱石と言われる、露頭している礫岩を切り出し、運搬して構築したと云われている。

青柳種信が編纂した『筑前国風土記抄遺』（文久三年―一八六三）の宗像郡宮司村の条には、「この窟、寛保元年（一七四一）の大風の後に、山が崖崩れによりはじめて、窟口が穿てり。」とあるだけで、開口した後には不動明王が祀られているが、出土の遺物に関しての記録はなにもない。

昭和九年（一九三四）に古墳前庭部の整地と整備を行なっている。この時に豪華絢爛に輝く、冠や馬具、ガラス板などが多量に発見され注目を集めた。

この一括出土の遺物と石室構造から、七世紀後半代の古墳に比定されている。地方豪族が所有している品々としては、はるかに群をぬき超大なものである。その時同時に石室内の床面も整理し、掘り下げたところ発見された遺物が、前庭部発見の遺物の一部であることが確認された。前庭のものは、石室が開口された以降数度に亘り取り出され、前庭部に埋納されたと推定される。

出土遺物については次回に述べることにする。

（写真は空からみた宮地嶽神社と宮地嶽古墳）

宗像むかし話 (10)

丸二屋橋

宗像郡神湊に丸二屋という商家があり、当主を代々三之丞と云った。この家は累代にわたって慈善事業を続け、近隣には今に至る迄その遺徳が語りつがれている。

十四代目の三之丞良節は前代の三之丞良廉に嗣子が無かったので、津屋崎の佐治徳左衛門の四男から入籍して家督を継いだ人であった。この人が実によく出来た人で、「宗像郡誌」には資性温厚、親につかえて孝、人に対して慈、常に家業に精励し家運益繁栄に趣き、屢金円を官に納めて、以て国恩の万一に報い、居村神湊は漁業者多く、冬季風波数旬に及ぶ時は、衣類は勿論鍋釜の如きものに至る迄、質物として糊口の料となし、生活の状態誠に惨憺たる光景なり。慈善深き翁は、その状を視るに忍びず毎次金穀酒の粕などを恵みて救恤し、善行の誉れ四境に高く、官庁に達し、屢褒賞を賜わりしのみならず、藩主より「善行の者」と書せる木礼を下賜せられ藩主江戸参勤上下行に当り之を建て送迎をなす云々と見えている。ために「郷長」の格を与えられた程であった。

彼は特に神を敬い、仏を信じて敬拝を怠ることがなかった。また、閑暇を得ては荒地をひらいて田畑を作り、勤労の尊さを世人に示した。

養父に捧げた歌が残っている。

「養わるるも養うも、深きえにしのあればこそ、こころにへだてあらざれば、うみの親子にことならめ」

彼は平政五年十一月廿九日に卒した。

十五代三之丞の良直は、先代にも勝る篤行家であった。毎年、年末には必ず村内の窮民を調査して年越米を恵んだ。文政元年から明治十七年に至る四十年の長い間、三之丞三代にわたってこれが続けられた。特に孝心深く、父君五十才の時に父君の木像を造らせた。父君の歿後はその木像に対して、生ける人に仕えるごとく、四時の服を換え、毎朝の食事をささげて拝した。彼は明治二年十月二十四日卒した。

その木像は、いま神湊の隣船寺にある。「善行者」の木札が傍に立てかけられ、煙管、莨が置かれている。隣船寺の禅師が今も朝夕の供養を続けている。

十五代目には特筆すべき善行があった。今の宗像町田熊字古森橋が不完全であったので、私財を投じて土橋を架設した。後に明治三十一年九月に十六代目がこれを石橋に改架した。今に「丸二屋橋」という。

十六代三之丞の良定は、これ亦父祖の名をはずかしめなかった。

郡誌によれば、貧しい漁民に蚊帳が無いので、五十張余を貸し与えた。（明治十五年）やってしまうと質に入れてしまうので、秋には返納させた。明治十七年の夏には百五十張に及んだという。その年は水害と不漁のため、村内に米三十五俵、粟五十余俵を施した。それらを、下男をして貧家の軒先まで運ばせたと伝えられている。この善行が知れぬ筈はない。明治八年と十八年には福岡県より表彰されている。ここに一つ、丸二屋の善行を慕う人の美談がある。昭和になってから、丸二屋橋も近代的なコンクリート橋に架け替えられた。そして、往時のいわれを知らぬ県側は「何とか橋」に改称した。これを聞いた隣船寺の和尚さんが憤慨した。

「そげなこつがあるもんか」

和尚さんは県庁まで乗り込んで一席ぶった。

その結果、「丸二屋橋」の名称は復活した。

今は世の中も往来する交通機関も違っているが、心ある人の心づかいによって、そのかみの「丸二屋橋」の名は、永久に伝えられるであろう。